

家に復員。その後半年間休養、体の回復後、町内の会社に就職。五十九年二月まで三十三年間勤務し退職した。

最近では盆栽造り、野菜作り、ゲートボール等で、楽しく暮らしている。

密林の火葬

高知県 齊藤 拓三

昭和二十年十二月上旬、私たちが雪道を徒歩でピラ二十キロの収容所へ辿り着いた時は、既に日は西に没していた。収容所は原生林の中に二棟孤立して並び、四囲はシベリア赤松の大樹が天に向かって林立し、重畳と連なっていた。

氷点下三十度―四十度という寒冷の中を、毎日歩哨に銃を向けられながら伐採作業や木材の集積作業に従事したが、このような重労働のため疲労衰弱の上に、食料不足による栄養失調に陥り、下痢を伴ったままや

せ細っていく。その体は骨と皮ばかりになり、まるで枯れ木のようなであった。山から帰る途中疲労のため倒れ、そのまま死ぬ人も増え続け、収容所から見える林の中では、死んだ人を焼く真つ赤な炎が夜を徹して燃え続けていた。

ある日の夕食後のことであった。私が寝る準備のため屋外に出て雪の上に放尿して戻ると歩哨が所内に来て、使役四人をすぐ出せと言っている。三人は確保できたようであるが、あと一人が足らぬようで、そこを運悪く私がかまってしまった。仕方なく、急ぎ防寒服をまとい歩哨の後についていく。収容所から三十メートルぐらい離れた小さな空室に歩哨が入る。私たちも続いて入った。室の真ん中の土間に一枚の板が置かれ、その上に死体が横たわっていた。中は暗かったが開かれた入口の雪明かりで、それが死体と認められた。栄養失調であらう、上下衣袴が脱がされ、白い襦袢のまま寒々と置かれている。死ぬと急激に頬がこけ始めるためか、頬の肉が骨に食いついて、まるで骸骨のようであった。

歩哨が「この死体を焼くから皆で持て」と言う。四人で板の角の尖ったところを持ち上げた。持ち上げた時、首のあたりがゴトンと鳴ったようである。暗いのと、運搬路が雪のため一人が足を捕られると板戸が傾斜して死体がずり落ちる。後ろの人が足を押さえないが進む。私たちは無言で進む。二百メートルぐらい行った山裾の凹地が焼却場所で、昨日焼却したような跡があつて焼け残った木が散乱していた。

私たちは死体を静かに雪の上に置く。そこらに散らばっている木などを集め、燃えやすいように交互に積み上げていく。おおよそ股の高さのところまで積み上げると、その死体を運び組み合わせた木々の上に上向きの姿勢で寝かせる。死体は冷たく凍っていた。死体の重さで積まれた木がゴソと鳴ってわずかに沈む。雪明かりに透けて見える顔はもはや黒色を呈していた。私たちは、その上に木片を拾つて積み重ねる。側で歩哨が「ダワイ」と叫ぶので、焼却作業も粗雑にならざるを得なかった。歩哨がマッチを一人の兵に差し出すと、その兵が屈んで火をつけようとしたが、寒さのた

め手が自由にならず、幾度も繰り返すうち、ようよう火がついた。

風は雪の上に沈んで静かである。チロチロと赤い炎がのぼつて次第に大きく広がっていく。氷点下四十度の夜風が周囲にただよう。あたりは炎の明かりで、そこだけが真紅で暗黒を吸うように燃え上がる。その炎の明るさで死体がチラと見える。私たちは死体が見えないように木の枝を数多くくべ重ねる。心の中で黙禱しながら、薪木を運んでは炎に投入する。パラパラと火の粉が、その人の御霊のように大きく暗黒の中に昇天して消えてゆき、その真下の真紅な一塊の炎だけが闇に閉ざされた大密林の中で灼熱のごとく猛り燃えているのである。

私はこの光景を見つめながら、いま焼かれている兵に對する哀憐というより、むしろ現実の悲惨さに限りない恐怖を覚えるとともに、私もいずれこのような運命を迎えるのではないかと思つた。

しかし、死ぬということについては恐れはしなかったが、この極寒のシベリアの密林の中で飢餓の状態の

まま死ぬということは、人間として耐え難い矛盾のよう
に思えた。生きたいと思った。どうしても死ななけ
ればならない運命であるならば、せめて日本の土を踏
んでから死にたいと思った。このシベリアの奥地の密
林地帯の静寂の中で、誰にも知られず、ひっそりと葬
り去られるということの悲慘さを思うと、身体がひと
りでおののくのであった。

もう燃え尽きたと思ったとき、歩哨が帰ると言う。
その歩哨の「ダワイ」の声に押されながら、凍りつく
雪道を無言で帰途についた。

応召地―秋田県、昭和十三年九月、臨時召集により歩
兵第十七連隊留守部隊

昭和十八年十月、充員召集により第一〇五連
隊（秋田市）に応召

転属―昭和十九年三月、新京独立守備歩兵第二七大
隊

七月、第一四国境守備隊、在鳳翔
昭和二十年七月、一三四師団司令部、佳木斯

武装解除―方正
入ソ地―レーニンスコエ

抑留生活をかえりみて

愛媛県 青木 明

終戦直前の昭和二十年七月二十日、北満州黒龍江省
嫩江街で、半官半民の特殊会社、満州自動車製造株式
会社専属工場の支配人として働いていた私にも召集令
状が届きました。これが、国境付近にいた日本人男子
全員に來た最後の召集令状だったのです。

現地に妻や子供を残し三日後嫩江部隊に入隊、すぐ
ゲリラ戦の遊撃隊に編入されました。兵舎にはこれと
いう目ぼしい武器もなく、毎日匍匐前進と木銃による
訓練のみが行われ、関東軍の精鋭部隊が南方や沖縄方
面に派遣された後の手薄な残留部隊は、対ソ連との戦
争には数の上でも全くお手上げの状態でした。

突如始まったソ連軍の満州侵略に対抗してごく一部